

### 西周の「哲学」の再検討を通じて実証哲学を新たに展望する

安孫子, 信 / ABIKO, Shin

---

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

7

(発行年 / Year)

2020-06-10

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02140

研究課題名(和文)西周の「哲学」の再検討を通じて実証哲学を新たに展望する

研究課題名(英文) A new perspective on the positive philosophy through a reexamination of the "Philosophy" of Nishi Amane

研究代表者

安孫子 信 (Abiko, Shin)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：70212537

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：「哲学」という語そのものを創案しつつ、西洋哲学を日本に始めて導入した西周の仕事の意味は、彼がまさに「哲学」で意味しようとしたことに依存する。西はオランダで出会い学んだ、当時隆盛の実証哲学、とりわけオーギュスト・コントの実証哲学を受け入れ、コントの意味での「哲学」を日本に導入しようとした。すなわちそれは、形而上学的哲学ではなく、それ自身が科学である実証的哲学であった。しかもその際に、西はコント以上に実証的であろうとしたのであって、諸科学を科学的に統一する場所を、コント自身が創設した社会学ではなく、むしろ生理学・心理学に求めた。本研究の何よりの成果は、西の「哲学」のこうした全体像の解明である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「哲学」という語を作り、まさにその名によって、西洋哲学を日本に始めて導入した西周の哲学の仕事の意味を、彼が依拠したコント哲学との徹底的な比較研究を通して、とくにコントに従った面と、コントに従わなかった面の二面を、明らかにした。西周が構想し手がけた哲学は文字通りの実証哲学であって、日本の哲学がまさにここを出発点としてその後の歩みを行っていけば、哲学の日本における位置も役割も、かなり違ったものになったはずなのである。

研究成果の概要(英文)： Amane Nishi's work, which originally introduced Western philosophy into Japan while inventing the word "philosophy" itself, depends on what he meant in "philosophy". Nishi accepted the positive philosophy in vogue at that time, especially Auguste Comte's positive philosophy that he met and learned in the Netherlands, and tried to introduce "philosophy" in the meaning of Comte to Japan. That is, it was not a metaphysical philosophy, but an empirical philosophy that was itself a science. Moreover, at that time, Nishi tried to be more positive than Comte, and sought a place to scientifically unify various sciences not in the sociology created by Comte himself, but in physiology and psychology. The most important result of this research is the elucidation of such an overall picture of the "philosophy" created by Nishi.

研究分野：哲学

キーワード：西周 哲学 実証哲学 オーギュスト・コント 社会学

## 1. 研究開始当初の背景

今日、西田幾多郎をはじめとする京都学派への国際的関心の高まりには目を見張らせるものがある。ただ、その際、日本でのその営為が、日本語で「哲学」と名づけられていること、その語が独特の語であり独特の意味を持ちうること、また、その語ばかりが今日日本で用いられている数多の哲学用語を訳語として案出し、文字通りに西洋哲学の日本への移入を果たした西周が、哲学ということで卓抜した見識を有して、この命名がその見識と無縁ではないということは、必ずしも知られたことではない。そしてそのことは、少数の先行研究はあるものの(鹿沼啓介氏と小泉仰氏の業績) 膝元の日本自身においてもそうであって、「哲学」という言葉が今日でも、日本社会で、必ずしも名誉ある位置を占めていないかのように見えるとすれば、それはこのような西の当初の仕事の見えづらさに起因しているとも考えられるのである。「哲学」の創始者西の真の意図、哲学者西の仕事の意味、それはまだ正確には把握されていない。

## 2. 研究の目的

以上のような事情にある西周の、西洋哲学の日本への導入時の仕事の全容を、精査して、西が、なぜ哲学を導入しようとしたのか、また彼が導入しようとした哲学とは何だったのか、そしてこれらの問いと深く関わることとして、それがなぜ「哲学」と名づけられたのかを明らかにすることが、研究の目的となる。西洋の諸科学は当時すでに広く受け入れられてきており、それは自然科学のみならず社会科学にも及んでいたのであり、まさにそのようなときに、科学とは別に哲学を移入することがなぜ求められたのか。(彼は社会科学を修めるために政府(徳川幕府)から津田真道とともにオランダへと送られたのであるが、そのとき、自身の個人的努力で、なぜ哲学をも学ぼうとしたのか。) またさらに言えば、当時までの日本には東洋の哲学的伝統がある意味で厚く受け継がれてきていたのであって、その中で、それとは別に、西洋哲学を移入することがなぜ求められたのか。(彼は幼少より儒学を人並み以上の仕方で修めていて、いわばほぼ完璧な仕方で「東魂」を身につけていたのであるが、そのとき、なぜ「洋才」だけでなく、いわば「洋魂」までをも学ぼうとしたのか。) これらの問いを、まさに西その人において問うこと、そして西からその答えを引き出すこと、それが研究の目的である。

## 3. 研究の方法

ほとんどが当時は未刊行の、そして今日では『全集』にかなり広く収められている西の諸論考の、精査、精読を、そこで西が明示的、また非明示的にも参照し、自らの思想の手がかりや養分としている諸家、諸書とクロスさせて実行し、西が古今東西の哲学の議論において、どのような取捨選択を、どのような理由で行っているのかを、細部においてまで、検証していくこと、それが一貫した研究方法となっていく。この作業は、東洋思想においては西対諸儒家たちに関して、また、西洋思想においては西対 J.S. ミルに関して、すでに行われており(先述の鹿沼啓介氏と小泉仰氏の業績) その限りで、本研究もそれらの方法を踏襲するものではあったが、本研究が向かったのは西にとってほぼ同時代と言ってよい、西洋思想のオーギュスト・コントに始まる実証哲学であった。コントの実証哲学の体系が、西においてどう踏襲され、どう忌避されていったのかを、一方でコント思想の広がりや深さを踏まえ、他方で西の哲学思想の展開を踏まえて、各箇所、両者の綿密な突合せを施しつつ、明らかにすることが行われていった。

## 4. 研究成果

上記研究の、西がコント実証哲学を踏襲している部分については、コント哲学の研究結果も踏まえて、とくに、人間と社会の研究において、西が、コント社会学の構想そのもの(さらにコントの人類教)には反対しつつも、世俗権と精神権の明確な分離を説く、実証主義の政治哲学には忠実に従って、そこから、彼自身、明治政府の高級官僚でありながら、当時の、「形而上学的」な民権思想と「神学的」な天皇制思想との両者から距離を保った、両者とは別の立場をとることができていたことを(たとえば、『軍人勅諭』の問題をめぐる) 確認していった。他方で、西がコント実証哲学を忌避して行った部分については、彼自身、医家の生まれではあったが、彼が、コントの生物学の哲学、とくに骨相学(脳科学)には従わず、逆にコントが退けた心理学(「性理学」)を評価して、そこから社会性以上に人間により根本的な人間性(human nature)に基づく社会哲学構想を打ち立てていたことを、確認していった(西の『人世三宝論』の評価)。こうして、最も総合的な科学(哲学の名に値する科学)を何と見なすかということで、すなわち、それを社会学にではなく心理学に認めていったということで、西は、コントとは袂を分かっていったのであるが、それでも、哲学を、科学の上でも下でもなく、むしろ科学そのものとして捉えるというまさにその点で、西は、コント実証哲学の根本構想に従っていたのであり、西はまさに

そのような実証哲学を日本に移入するために、「哲学」という言葉をも案出していたのであった。西が企図したような「哲学」が、もしもそのようなものとして継承されていったならば、日本の哲学は、神学的状態や形而上学的状態を経ずに、コントの言う「三状態の法則」の、最終の、実証的状态からスタートし、さらにそれを推し進めていく道を歩んだはずである。しかし、実際には、日本の哲学は、西の「哲学」を理解せず、西が設定したスタートには成功せずに、訳語を含め言葉だけは継承したものの、その後、東大の講壇哲学（いわば‘形而上学的’哲学）から、さらには京都学派の哲学（いわば‘神学的’哲学）へと、「三状態の法則」をまさに逆行していくような歩みをたどって行くことになったのである。西の「哲学」を真に理解することから始めて、実証哲学の観点から新たに日本の哲学を見直していかなければ、日本において哲学を生命あるものにしていくことはできないのではないか、そのように思われるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 安孫子信	4. 巻 15
2. 論文標題 西周の新しい実証哲学 「人世三宝論」が示唆するもの	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際日本学	6. 最初と最後の頁 179 - 200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安孫子信	4. 巻 14
2. 論文標題 近代の超克 の自然観	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国際日本学	6. 最初と最後の頁 150 - 175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 5件/うち国際学会 7件）

1. 発表者名 安孫子信
2. 発表標題 L' introduction de la philosophie occidentale au Japon par Nishi Amane et la nature
3. 学会等名 国際シンポジウム 日本哲学入門 、パリ・ナンテール大学（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安孫子信
2. 発表標題 Amane Nishi et l' histoire des sciences
3. 学会等名 国際ワークショップ 実証哲学と科学史 、法政大学（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安孫子信
2. 発表標題 実証的形而上学
3. 学会等名 『物質と記憶』を再起動する(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 安孫子信
2. 発表標題 コントとベルクソンの人類の思想
3. 学会等名 フランス19世紀思想研究会ワークショップ(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 安孫子信
2. 発表標題 西周の哲学における自然と人間 近代科学の受け皿の問題
3. 学会等名 国際シンポジウム 人間の試練にさらされる日本の自然 (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 安孫子信
2. 発表標題 Lire 'Comte after Positivism' de Robert Scharff
3. 学会等名 国際ワークショップ 新たな科学哲学としてのコント実証哲学 (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 安孫子信
2. 発表標題 Bushido et le Japon moderne- NISHI Amane et NITOBE Inazo
3. 学会等名 特別講演会 日本哲学 (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 平井靖史、藤田尚志、安孫子信	4. 発行年 2018年
2. 出版社 書肆心水	5. 総ページ数 415
3. 書名 ベルクソン『物質と記憶』を再起動する 拡張ベルクソン主義の諸展望	

1. 著者名 陣内秀信	4. 発行年 2019年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 284
3. 書名 新・江戸東京研究: 近代を相対化する都市の未来	

1. 著者名 Shin Abiko, Hisashi Fujita, Yasuhiko Sugimura	4. 発行年 2018年
2. 出版社 OLMS	5. 総ページ数 279
3. 書名 Mecanique et mystique	

1. 著者名 平井靖史、藤田尚志、安孫子信	4. 発行年 2016年
2. 出版社 書肆心水	5. 総ページ数 381
3. 書名 ベルクソン『物質と記憶』を解剖する	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----